三重県埋蔵文化財報告 135

敷伝遺跡(第2次)発掘調査報告

――鈴鹿市徳居町字敷伝――

１９９６・３

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、私たちの祖先が過去の時代を生きてきた証です。それらの過去の文化遺産は、私たちに当時の人々の様々な思いを語りかけてくれます。遺跡の発掘調査によって私たちの前に姿を現した埋蔵文化財は、私たちからの問い掛けをまっています。

しかし、一度発掘された遺跡はもう二度ともとに戻ることはありません。近年の各地の緊急な道路の建設や改良に伴う発掘調査によって、夥しい数の遺跡が記録保存の名のもとに姿を消しています。私たちの生活が至便なものになる一方で、支払うべき代償があることを常に忘れてはならないでしょう。

今回、ここにご報告致しますのは、一般地方道鈴鹿芸濃線地方特定道路整備工事に伴って消失する敷伝遺跡の発掘調査結果であります。この報告によって、失われた遺跡にかつて住んでいた人々の生活の一端なりを、垣間見ていただけましたら、これに勝る喜びはありません。

最後になりましたが、協議から発掘調査に至るまで多大なご理解とご協力をいただきました県土木部、道路建設課並びに鈴鹿土木事務所、鈴鹿市教育委員会、徳居町をはじめとする地元の方々には、深く感謝の意を表明致します。

平成８年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　川　村　政　敬

例　　言

1．本書は、三重県鈴鹿市徳居町字敷伝に所在する敷伝（しきでん）遺跡（第２次）の発掘調査報告書である。

2．調査は、一般地方道鈴鹿芸濃線地方特定道路整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。なお、本遺跡の表記については、平成元年度に調査された段階では敷田遺跡としているが、今回の調査に先立って字切図等を検討した結果、調査地の字名は「敷伝」であり、この表記に従うこととした。

3．調査は次の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

技師　　日栄　智子

主事　　西出　　孝

主事　　竹田　憲治

4．調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、鈴鹿土木事務所、鈴鹿市教育委員会、シルバー人材センター及び地元の方々からの多大な御協力をいただいた。

5．発掘調査後の出土遺物の整理及び当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行い、以下の方々の補佐を得た。執筆及び全体の編集、出土遺物の写真撮影は、日栄智子が行った。

足立純子、有川芳子、石橋秀美、井村浩子、柿原清子、川口　愛、井田美奈子、楠純子、倉田由起子、小林佳代子、須賀幸枝、杉原泰子、武村千春、田中美樹、豊田幸子、富楽幸子、中川章世、中山豊子、西田衣里、西村秋子、浜崎佳代、早川陽子、堀内博子、松本晴美、松月浩子、森島公子、柳田敬子（50音順、敬称略）

6．挿図の方位は、全て真北で示している。なお、磁針方位は西偏６°40′（平成６年）である。

7．本書で用いた遺構表示略記号は、下記による。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　ＳＺ：性格不明遺構

8．出土遺物や資料は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ．前　　言……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．層位と遺構……4
Ⅳ．遺　　物……8
Ⅴ．結　　語……12

挿図目次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　遺跡地形図……4
第３図　調査区位置図……4
第４図　調査区遺構平面図・土層断面図……5
第５図　ＳＺ11遺物出土状況図……6
第６図　ＳＢ12・13実測図……7
第７図　ＳＫ１実測図……7
第８図　ＳＫ10実測図……7
第９図　出土遺物実測図（１）……9
第10図　出土遺物実測図（２）……10

表目次

第１表　出土遺物観察表（１）……13
第２表　出土遺物観察表（２）……14

図版目次

図版１　調査区全景（西から）……15
　　調査区全景（東から）……15
図版２　ＳＺ11遺物出土状況……16
　　ＳＫ１遺物出土状況……16
図版３　ＳＢ12……17
　　ＳＢ13……17
図版４　出土遺物……18

Ⅰ．前　　言

（1）調査の契機

三重県教育委員会及び埋蔵文化財センターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内にある文化財の確認とその保護に努めている。こうした中で、三重県土木部道路建設課から、一般地方道鈴鹿芸濃線地方特定道路整備工事にかかる事業計画の照会を受けた三重県埋蔵文化財センターでは、平成２年度末に事業予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、事業予定地周辺の中ノ川北岸には周知の遺跡として敷伝遺跡が存在し、今回の事業地内である南岸にも遺跡が広がっていることが判明した。

そこで、平成６年３月７日に三重県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した結果、事業地内の400㎡について遺溝、遺物が確認された。

この取扱いについては、その保護に努めるよう県土木部や道路建設課、鈴鹿土木事務所、県埋蔵文化財センターの間で協議を重ねたが、現状保存が困難なため、やむなく事前に発掘調査を行うこととなった。

（2）調査の経過

敷伝遺跡の調査については、今回の調査地点の対岸（北岸）で平成元年度に県営圃場整備に伴い発掘調査が行われている（敷伝遺跡第１次調査と呼称）。今回の調査地点は中ノ川の右岸に位置するため当初は「別所Ｂ遺跡」として把握していた。しかし、試掘調査の結果、中ノ川の現流路は近年の河川改修によってつけかえられたもので、もともと調査地点の南側を流れていたものであり、敷伝遺跡の一画にあたると判断された。そこで、今回の調査に際しては敷伝遺跡第２次調査として報告を行う。なお、遺跡名については第１次調査では「敷田遺跡」と呼称していたが、小字名が「敷伝」であるため、今回以降「敷伝遺跡」と改称した。

今回の調査は、１次調査の成果を踏まえながら、平成７年５月15日から６月９日まで実施した。小地区の設定にあたっては、４ｍ×４ｍを基準として北から南へアルファベット、西から東に数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

調査日誌（抄）

月　日

５．15　プレハブ・トイレ設置。

５．16　調査区表土を重機により除去。

５．17　小地区設定及びレベル移動。

５．19　発掘資材搬入。

５．22　東側より遺構検出開始。８・９列まで完了。

５．23　遺構掘削開始。７列まで遺構検出完了。

５．24　１～６列遺構検出完了。ＳＫ１・２、ＳＤ３・４掘削開始。

５．25　北壁土層断面実測。

５．26　ＳＫ１清掃、写真撮影後実測。ＳＤ３・４掘削の続き。ＳＤ６・７掘削開始。東壁土層断面実測。

５．29　雨のため現場での作業中止。

５．30　ＳＫ１遺物出土状況実測。ＳＤ６・７掘削完了。ＳＤ８・９掘削開始。調査区西側のピット掘削開始。

６．１　ＳＫ10掘削。調査区西側の撹乱掘削開始。遺構平面実測のための基準点設定。

６．２　西側の撹乱の下から古墳時代前期の土器出土。ＳＺ11とする。ピット掘削完了。

６．５　ＳＺ11範囲確定後、掘削。ＳＢ12・13写真撮影。遺構平面実測開始。

６．６　調査区全体を清掃後、写真撮影。ＳＫ10土器出土状況実測。ＳＺ11土器出土状況の写真撮影及び実測。掘削作業完了。

６．７　遺構平面実測完了。ＳＺ11出土状況実測完了。ＳＤ３～９土層断面実測。

６．８　調査区北側及びＳＺ11付近を重機により掘り下げる。中世以前の明確な遺構は確認できなかった。北壁土層断面補足。トイレ、電話撤収。現場での調査終了。

６．９　道具撤収。

II．位置と環境

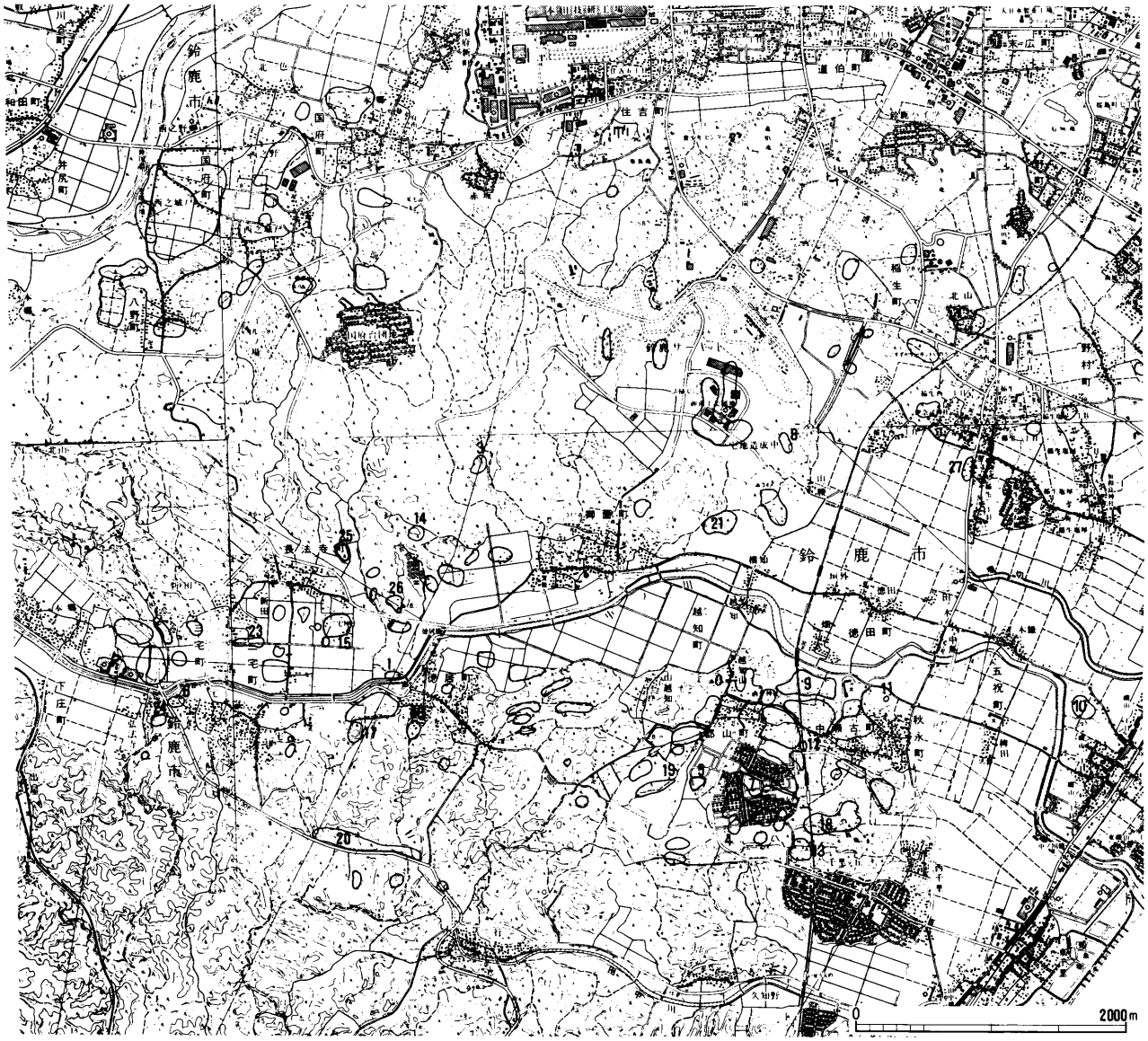
敷伝遺跡は三重県鈴鹿市の南西部、徳居町字敷伝に所在する。当遺跡は、鈴鹿郡関町南方の山岳地帯に源を発し、亀山市、鈴鹿市南部を東流して伊勢湾に注ぐ、中ノ川の中流域に位置する。ただし先述の様に中ノ川の現流路は近年の河川改修によって変更されたもので、もともと当遺跡付近ではその南側を流れていたところから、遺跡の立地としては左岸側の標高13m前後の河岸段丘上ということになる。

当遺跡（1）の位置する中ノ川流域には、古くは旧石器時代から数多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代には祓山遺跡（2）[①]、乙部遺跡（3）[②]があり約2万年前と見られるナイフ形石器や縦長剝片が採集されている。

縄文時代になると、追分遺跡（4）[③]、西川遺跡（5）[④]、西条遺跡（6）[⑤]等のように丘陵上に竪穴住居をつくり、生活を営む集落遺跡が確認されるようになる。特に郡山遺跡群には追分遺跡（4）の他に末野A遺跡（7）も縄文時代の遺跡として知られており、郡山の台地が、古くから人々の生活の場として利用されていたことが窺える。

続く弥生時代には、稲作の開始と共に本格的な集落の形成が始まるようになる。この時代の遺跡には弥生時代後期の竪穴住居や断面V字状の溝が見つかっている南谷遺跡（8）[⑥]、甕や高杯が採集されている



第1図　遺跡位置図（1：50,000　国土地理院　亀山・椋本・鈴鹿・白子　1：25,000から）

畑遺跡（9）[7]、外縁付鈕式の銅鐸が出土している磯山遺跡（10）[8]等がある。

このような弥生時代における本格的な集落は次第に各地域毎に集約され、その支配者は豪族化し、より大きなクニが形成され、各地の豪族は自己の権力誇示のために競って巨大な墓を築造し始めるようになる。古墳時代の幕開けである。前期の古墳には、三角縁神獣鏡が出土し、4世紀後半代と考えられる赤郷塚古墳（11）[9]や玉類、武具、鉄器等の豊富な副葬品を持つ5世紀前葉の帆立貝式前方後円墳である経塚古墳（12）がある[10]。これらの古墳は、中ノ川流域にも畿内のヤマト政権と繋がりを持つ支配者が存在したことを物語っている。

5世紀後半以降になると、三宅町から御薗町一帯にかけての中流域の丘陵上に寺谷古墳群（13）、長法寺古墳群（14）、加和良古墳群（15）、徳居古墳群（16）、別所古墳群（17）等の古墳群が造営されるようになる。また郡山の丘陵には、20～40数基の古墳から成る茶臼山古墳群（18）、大野古墳群（19）といった大規模な古墳群も知られている。これらの大規模な古墳群との関連で注目されるのは、中ノ川と河芸町の田中川の流域に分布する徳居窯跡群(20)であろう[11]。この遺跡は約30基あまりから成る須恵器の窯跡群で、操業期間は6世紀前半から8世紀後半と考えられ、三重県最大規模のものとされている。ここでの須恵器生産は、古墳時代の支配層との密接な関係を持っていただろうことは想像に難くない。

古墳が群集墳化していく中で、次第にヤマト王権による中央集権の波は、この地域にも押し寄せることになる。飛鳥・奈良時代の遺跡は高井B遺跡(21)、西高山A遺跡（22）がある。西高山A遺跡の含まれる郡山遺跡群で住居跡や出土遺物が増加するのは古墳時代の終末から奈良時代にかけてであると見られているが[12]、中ノ川流域にあたる奄芸郡の郡衙が郡山町の付近に置かれたという見解を裏付けるものといえよう。

中世の遺跡としては、今回報告する敷伝遺跡（1）[13]がある。平成元年度の第1次調査では、平安後期から末期にかけての集落跡と考えられており、総柱の掘立柱建物1棟の他、この建物を区画したと考えられる溝や土坑等が検出されている。これらの遺構に伴う遺物は少なかったが、遺物包含層からは土師器皿、山茶椀、山皿等が出土している。また、中ノ川北岸の河岸段丘上に鎌倉時代初めから戦国時代にかけて営まれた集落跡である橋門遺跡（23）[14]がある。遺構としては、総柱の掘立柱建物10棟やそれらをとり囲む溝、柱列、井戸等が検出されている。遺物には山茶椀、土師器の鍋等の他、二次焼成を受けた瓦が出土しており、周辺の寺院施設との関連が想定されている。

中世の中ノ川流域を概観するもうひとつの視点として、中世城館の存在が挙げられる。南岸には三宅西条城跡（24）[15]、北岸には長法寺城跡（25）、三宅城跡（26）、稲生城跡（27）などが所在している。中ノ川流域の丘陵地帯に位置するこれらの城館は、丘陵を自然の要害として利用していたものと考えられる。

III. 層位と遺構

1．層位

当遺跡の基本的な層序は、第1層：表土、第2層：客土、第3層：灰褐色シルト（平安時代後期～鎌倉時代遺物包含層）、第4層：黄褐色シルト（古墳時代遺物包含層）、第5層：青灰色粘土（古墳時代遺物包含層）、第6層：黄色砂質シルトの順であり、平安時代後期～鎌倉時代の遺構検出は黄褐色シルトの上面で行った。

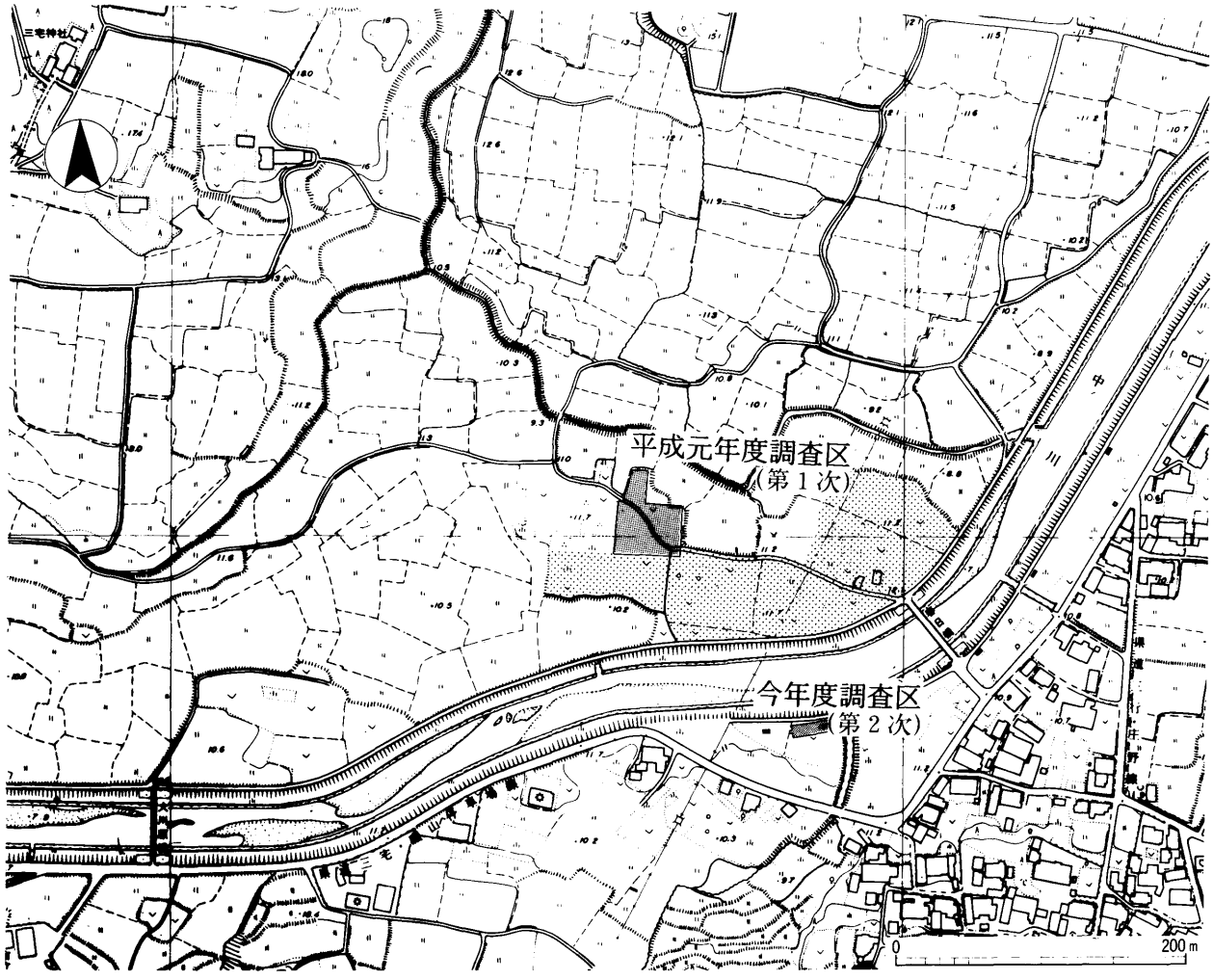
第3層の平安時代後期～鎌倉時代の遺物包含層はほぼ水平に堆積しているが、第4・5層の古墳時代遺物包含層は、調査区西端近くから徐々に東に向かって低くなっている。また第6層には磨滅を受けた縄文土器の小片が若干含まれていた。

なお、調査区南側には、河川改修施行時のものと考えられる撹乱が広がっている。

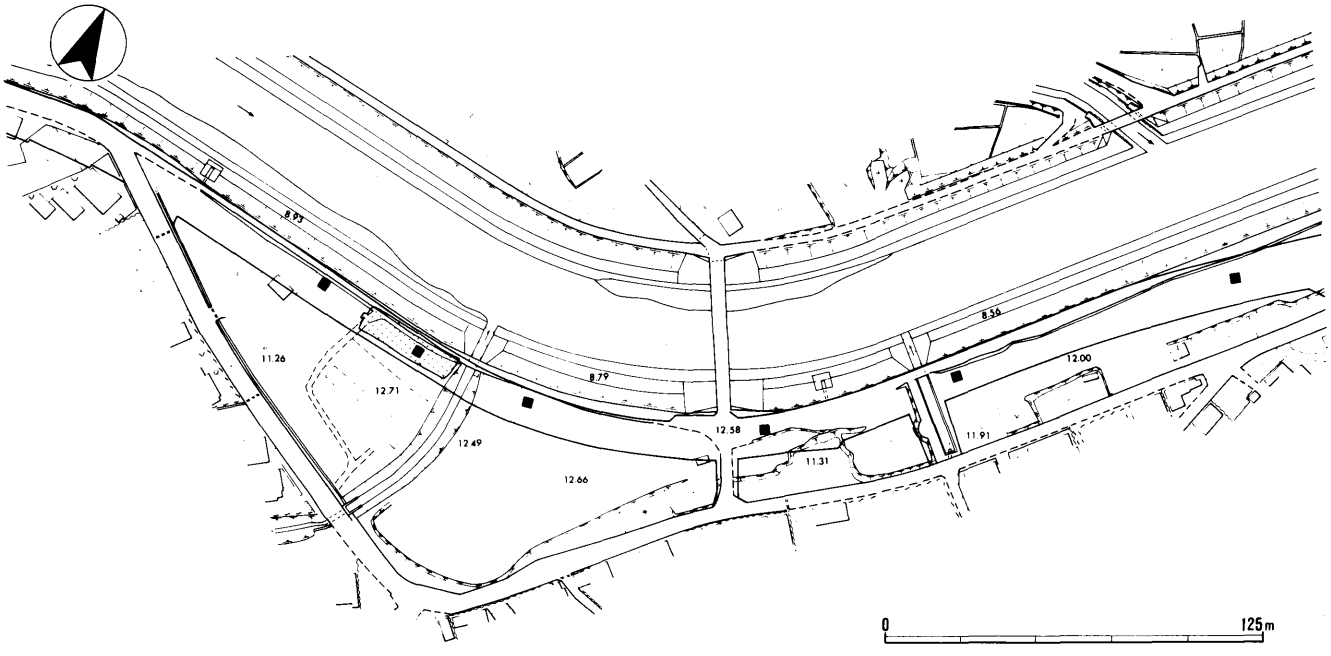
2．遺構

A．古墳時代の遺構

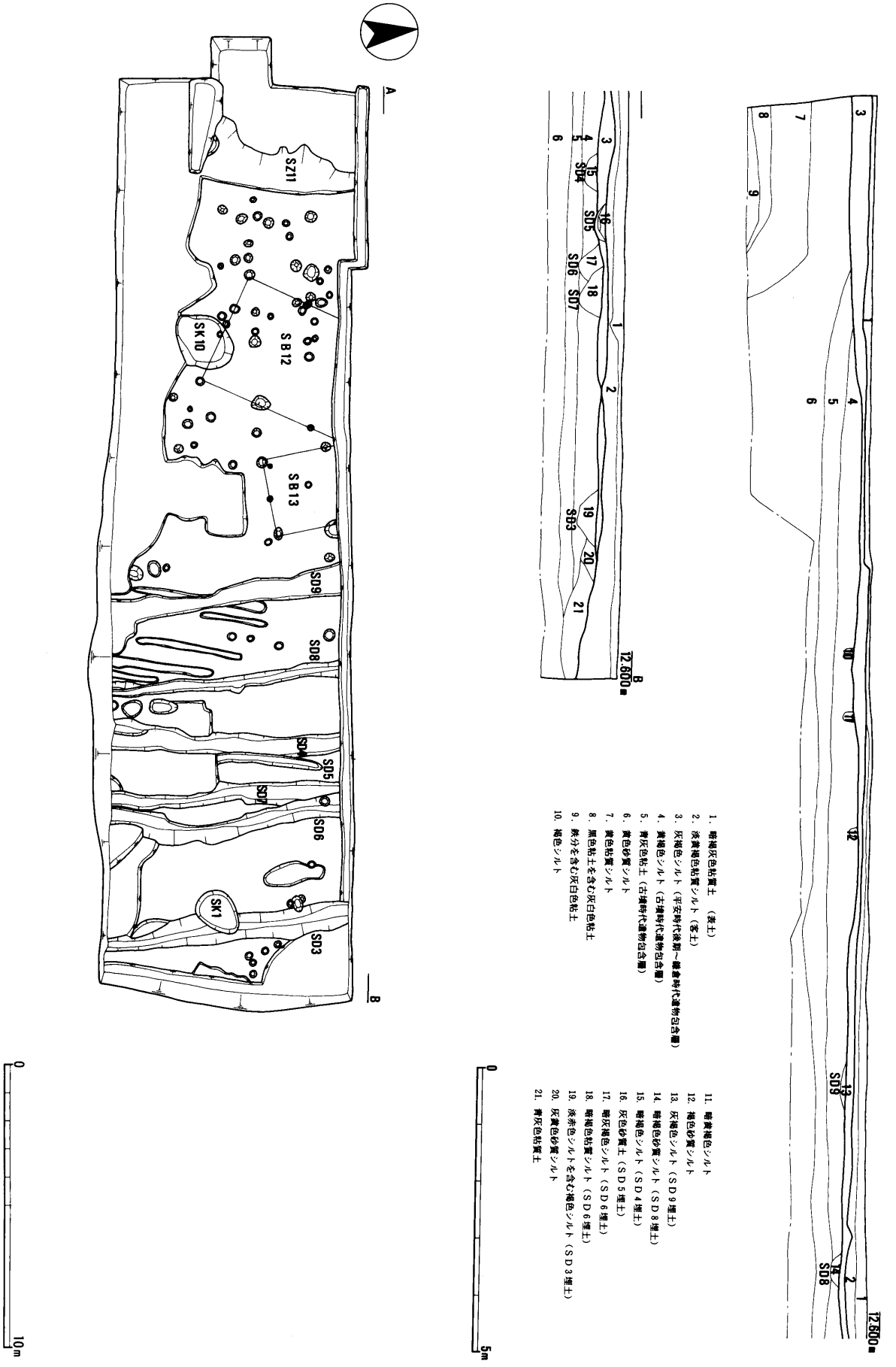
ＳＺ11　調査区西端で東西に約6ｍの広がりをもっ



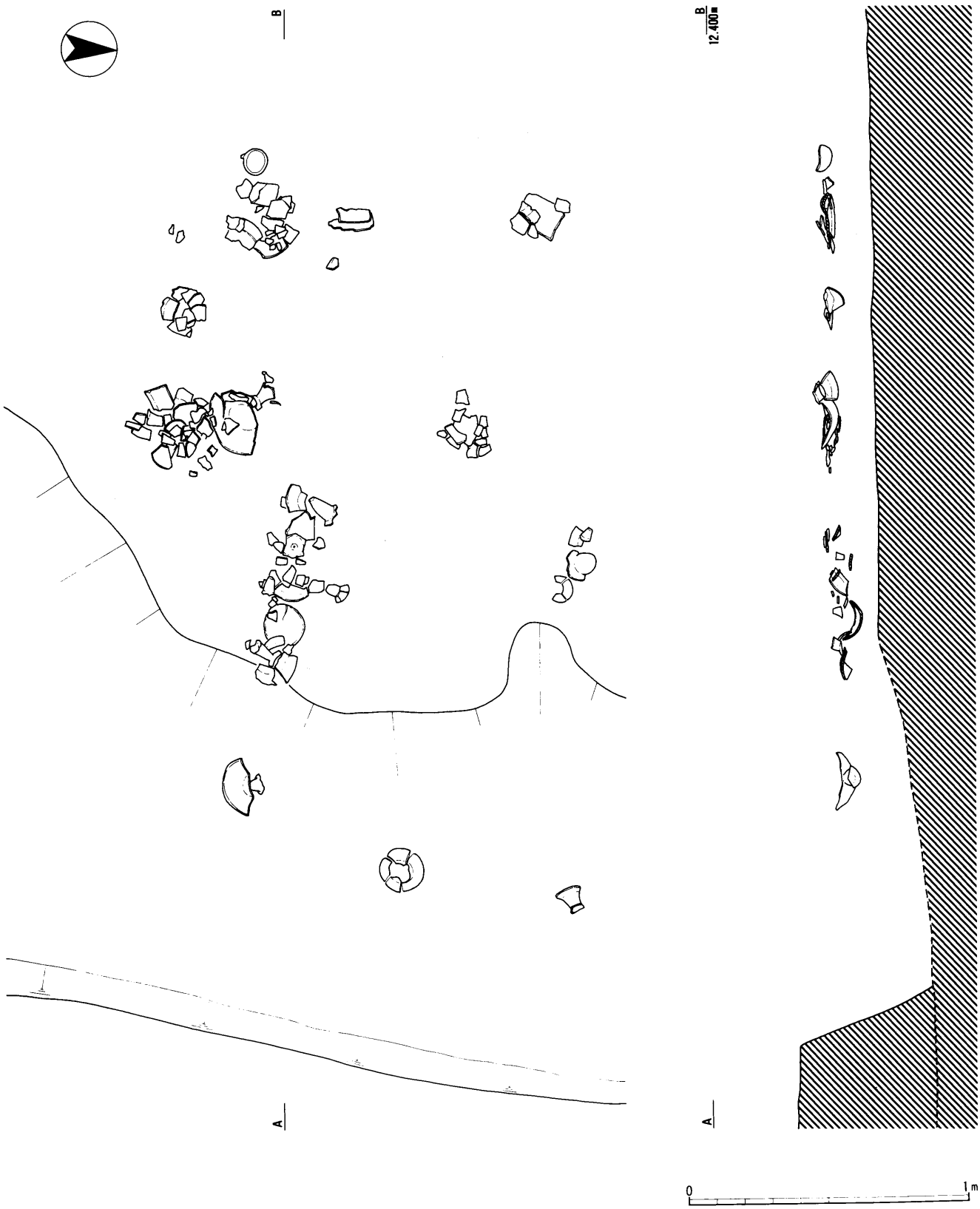
第２図　遺跡地形図（１：5,000）



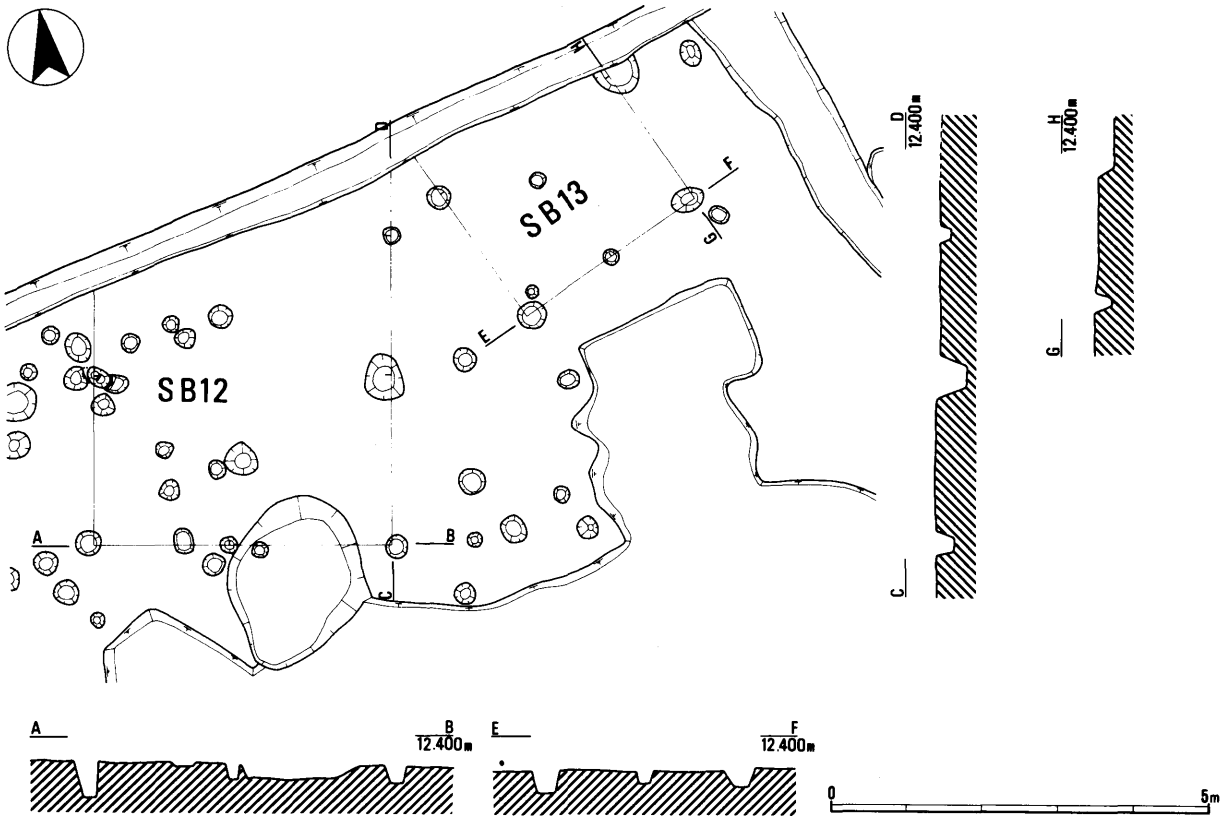
第３図　調査区位置図（１：2,500）



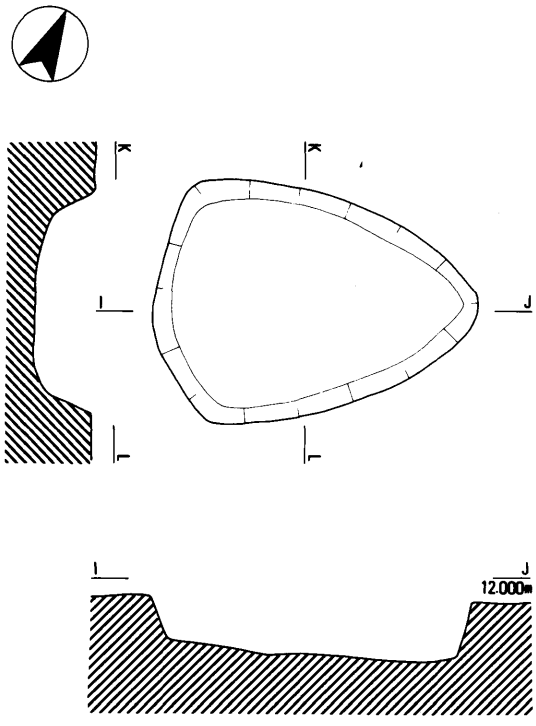
第4図　調査区遺構平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



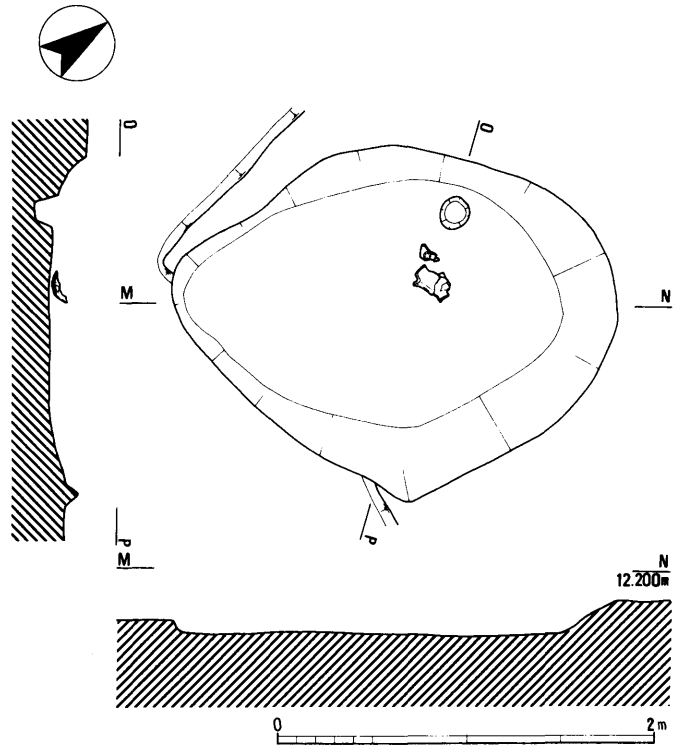
第５図　ＳＺ11遺物出土状況図（１：40）



第６図　ＳＢ12・13実測図（１：100）



第７図　ＳＫ１実測図（１：40）



第８図　ＳＫ10実測図（１：40）

て古墳時代前期の土器が集中して検出された性格不明の遺構である。包含層が緩やかに東に傾斜する部分にあたり、土師器の高杯、甕、小型丸底壺等が出土した。遺構の東側の肩はよく確認できなかった。西側に関しては、河川改修時のものと考えられる撹乱によって壊されていたため、西への広がりは不明である。

B．平安時代後期～鎌倉時代の遺構

（1）掘立柱建物

ＳＢ12　調査区西半で検出した。東西は２間、南北は調査区外に至るが２間分を確認した。北面妻柱が認められなかったことから棟方向Ｎ９°Ｅの南北棟であると考えられる。出土遺物から平安時代末期の建物と考えられる。

ＳＢ13　ＳＢ12の東で検出した建物で、東西は２間、南北は調査区外に延びるが１間分を確認した。柱間は不揃いである。南北棟と考えられ、棟方向はN27°Wである。時期を決定できる遺物はなかったが、ＳＤ８・９と方向が揃っていることや柱穴の規模や形状もＳＢ12と類似していることなどから、平安時代末～鎌倉時代初の建物である可能性が高い。

（2）溝

ＳＤ３　調査区東端で検出した南北溝である。幅1.1m、深さ0.4mで、断面は逆台形である。ＳＫ１に切られるが、出土した山茶椀等から時期はＳＫ１とほぼ同じで、概ね13世紀末～14世紀初め頃であろう。

ＳＤ４　調査区中央東寄りで検出した南北溝である。幅1.2m、深さ0.35mで、断面形はＶ字状である。溝底は南に向かって緩やかに傾斜している。12世紀後半から13世紀前半の山茶椀の他、土師器の鍋が出土している。

ＳＤ６　調査区東寄りで検出された南北溝である。幅1.1m、深さ0.48mで、溝底は南に向かって0.2m程傾斜している。溝自体は緩やかに蛇行している。遺物は山茶椀、山皿等が主体で、検出した溝の中では最も多く出土した。時期は13世紀初～末頃であろう。

ＳＤ７　調査区東寄りで検出した南北溝である。幅0.7m、深さ0.5mで溝底は北側では0.1m程浅くなる。北端と南端をＳＤ６に切られる。時期は、ＳＤ６よりは若干古いと考えられる。

ＳＤ８　調査区中央東寄りで検出された南北溝である。幅0.5m、深さ0.2mで、溝底は南に向かってやや浅くなる。ＳＤ６・７よりは若干古いと考えられる。

ＳＤ９　調査区のほぼ中央で検出された南北溝である。幅1.1mで深さは0.07mと浅く、溝の底はほぼ水平である。方向はＳＤ８とほぼ揃っているが、時期は平安時代まで遡りそうである。

（2）土坑

ＳＫ１　東西1.3m、南北1.7m、深さ0.3mの三角形に近い楕円形の土坑で、調査区の東端で検出した。多量の石と共に常滑窯産の甕や山茶椀等が廃棄されていた。ＳＤ３を切っているが、時期はほぼ同じく13世紀末～14世紀初め頃であろう。

ＳＫ10　東西1.3m、南北1.9mの楕円形を呈し、深さは0.2mほどで底はほぼ水平である。ＳＢ12の南側で検出されたが、切り合いは不明である。灰釉陶器、土師器皿・鍋等が出土しており、ＳＫ１と同様廃棄土坑と考えられる。時期はＳＢ12・ＳＤ９とほぼ同じくらいで平安時代末まで遡るようである。

C．その他の遺構

ＳＤ５　ＳＤ４を切って検出された南北溝である。南半分は撹乱によって壊されているため延長は不明である。幅0.38m、深さ0.05mという浅いもので、出土遺物から近世以降の遺構と判断した。

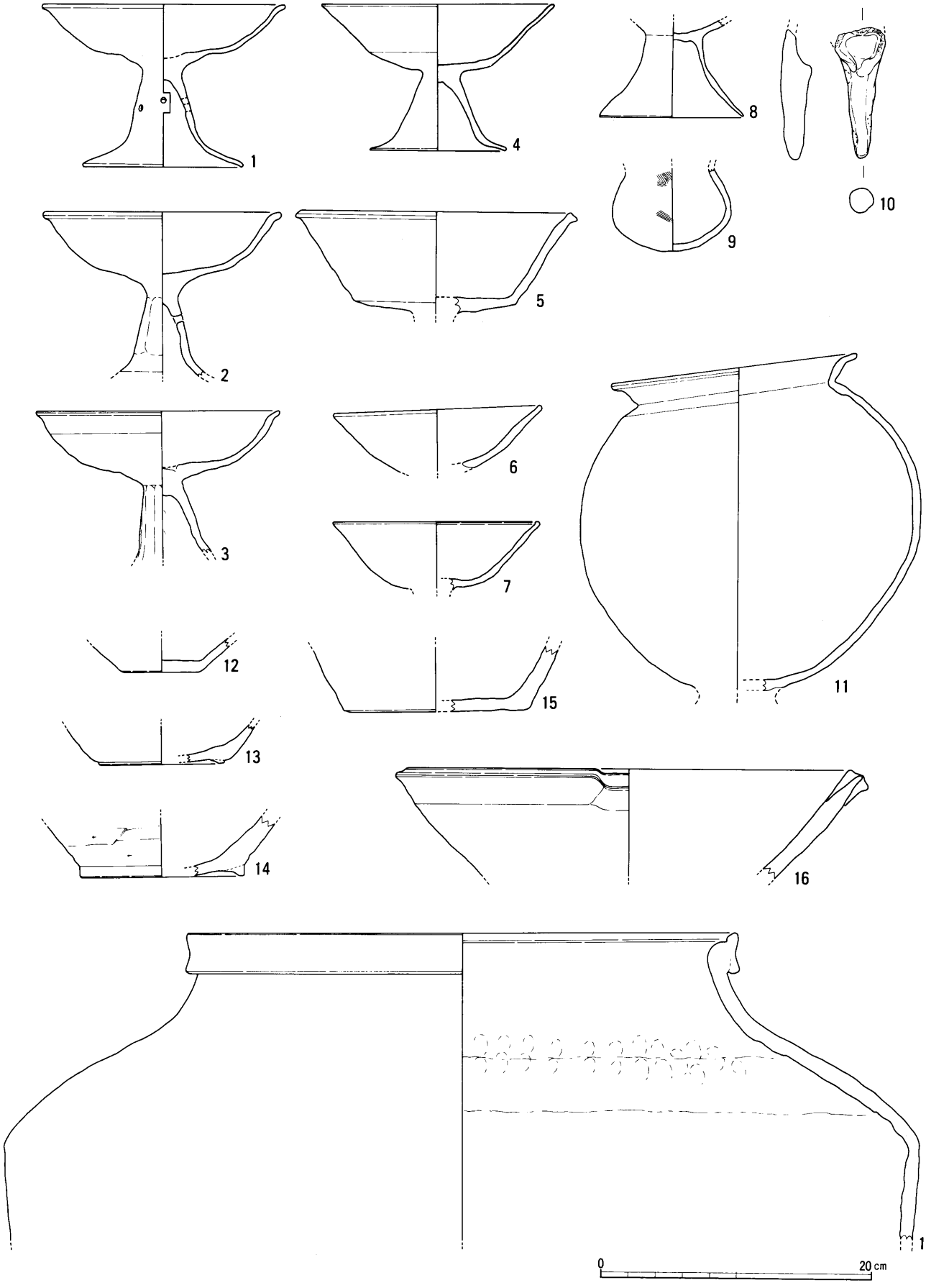
Ⅳ．遺　　物

遺物は、整理箱に約７箱出土している。平安時代以降の遺物が大半を占めるが、古墳時代前期の土器もＳＺ11からまとまって出土している。以下、遺構毎にその概略を述べる。

（1）古墳時代前期の遺物

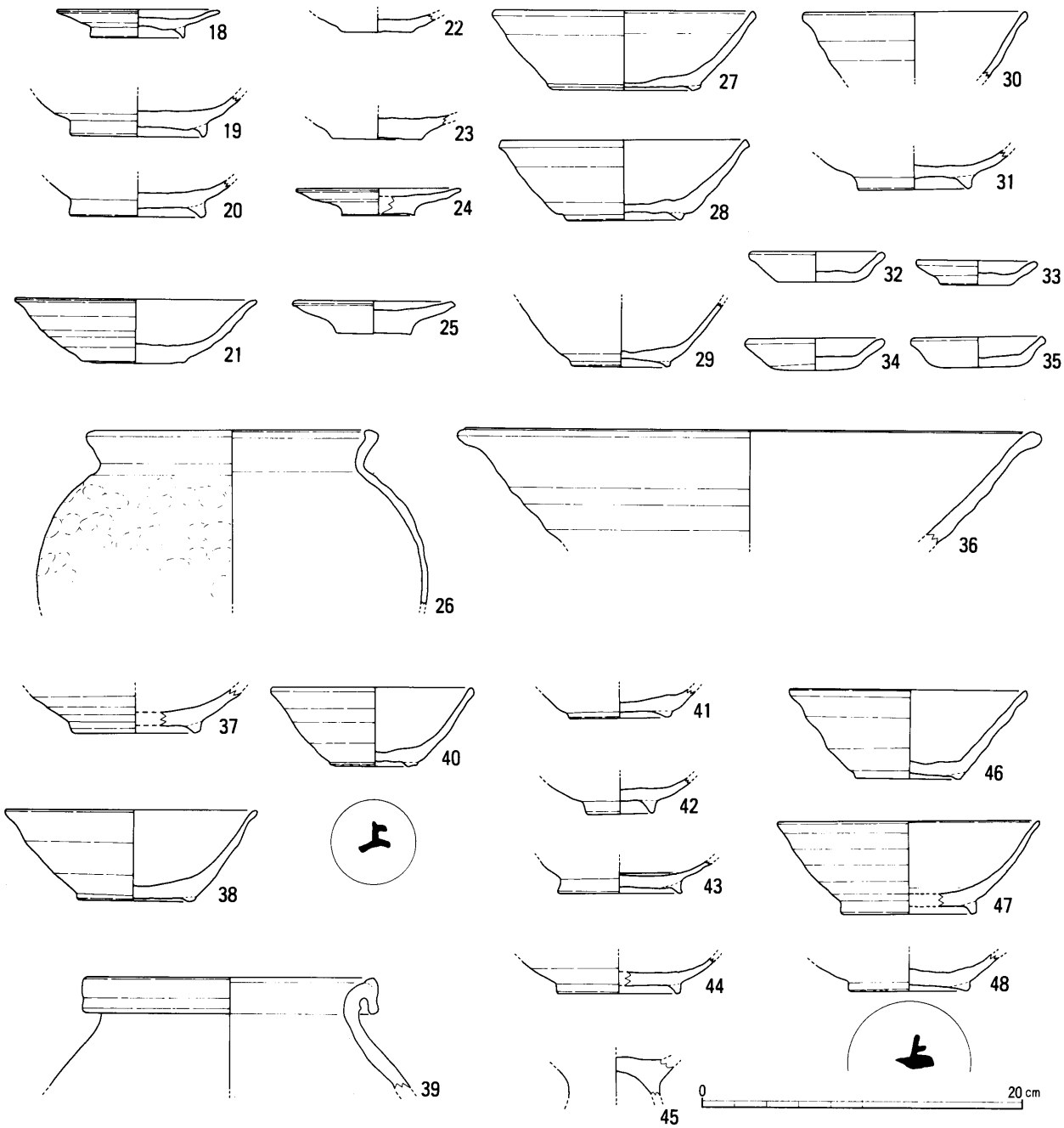
ＳＺ11出土遺物（１～12）

ほぼ一括資料と見てよく、時期は古墳時代前期のものと思われる[16]。器種は高杯が大半を占める。



第９図　出土遺物実測図（１）（１：４）

1～9は土師器の高杯である。1は全体の器形が窺える唯一のものである。杯部は底部から口縁部に向かって緩やかに外反する。外面はナデにより調整されている。脚部は直線的な柱状部に屈折する裾部を持つ。柱状部に2方向の孔を穿つ。脚部内面はナデ調整およびシボリ痕がのこる。2は杯部口縁端部の外反が顕著でヨコナデにより調整されている。脚部は裾部を欠くが、柱状部外面は工具によるナデが施され、1方向のみの穿孔が見られる。内面にはシボリ痕が残る。3は杯部内外面にはナデ調整、口縁端部は外反しヨコナデされている。脚部は裾部を欠くが、柱状部外面は面取り状のナデが見られる。4は磨滅が激しく調整は不明である。杯部は底部から口縁部にかけては直線的で端部の外反が弱い。5～7は杯部のみの資料である。いずれも内外面はナデ、口縁端部はヨコナデにより調整されている。ただし、7の外面だけは磨滅が激しく調整が不明である。8は脚部のみの資料である。わずかに内弯する



第10図　出土遺物実測図（2）（1：4）

脚部を持ち、前述のものよりは古い様相が窺える。内外面共に磨滅が激しく、調整は不明である。9は小型丸底壷であり、内外面はナデにより調整されている。10は用途不明の土製品である。パイプ形土器に類似する中実の棒状のものに匙状に開く部分が付くと思われるが、匙状部分の磨耗が激しいため、このまま上方に広がるのか、内側へ屈曲するのかは判断しかねる。11は土師器の台付甕で、台部は欠損している。口縁端部はヨコナデ、胴部内外面はナデ調整が施されている。胴部外面は部分的に黒斑が認められる。

（2）平安時代後期～鎌倉時代の遺物

山茶椀を中心として陶器の甕、土師器の皿、鍋などが出土している。

ＳＫ１出土遺物（12～17）

12・13は山茶椀の底部である。12は糸切り痕を明瞭に残し底部内面はナデ調整されている。体部は直線的で底径も小さいことから、概ね藤澤編年第７型式に比定できよう[17]。13は、高台を貼り付けた後ナデにより調整されている。底部内面には若干自然釉がかかる。14は陶器の片口鉢の底部で、ごく低い高台を貼り付けた後にナデ調整されている。外面はヘラケズリが行われている。15～17は、いずれも常滑窯の製品である。15は甕の底部で、内外面ともにナデ調整が施されているが、底部外面は無調整のままである。16は片口鉢で、口縁端部は角張り、注口部の突出も弱くなるという新しい様相を呈している。17は甕で、頚部内面に粘土接合痕が認められる。口縁部は断面Ｎ字状を呈し、肩部も張っていることから16と同様に新しい様相が認められ、概ね中野編年６型式あたりに比定でき[18]、山茶椀の年代観ともほぼ矛盾しないと思われる。

ＳＫ10出土遺物（18～26）

18は灰釉陶器の皿、19・20は灰釉陶器の椀の底部である。いずれも底部外面に糸きり痕を明瞭に残し、断面三角形の高台を貼りつけた後、ナデにより調整されているもので、百代寺窯併行期に比定できようか[19]。21は土師器の椀で、底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。体部は比較的丸味を持ち、口縁部にかけてやや外側に開く。22～25は土師器の皿で、いずれも底部に糸切り痕を残し、内外面をナデにより調整している。24は、外面が全面黒灰色を呈している。26は土師器の甕で、口縁端部はくの字形に屈曲し、球形状の胴部を持ち外面は指オサエ、内面はナデにより調整されている。

ＳＤ３出土遺物（39）

１点しか図化できなかったが、陶器の甕で産地は常滑である。口縁部は断面Ｎ字というよりは、逆ト字状を呈しており端部は比較的丸く仕上げている。概ね中野編年６型式に比定できよう[20]。

ＳＤ６出土遺物（27～36）

27～30は山茶椀である。27・28は口縁端部の面取りが顕著であり、高台はかなり簡略化され潰れている。底部内面に指オサエの痕跡が残る。29・30は前者のものに比べると器壁が若干薄くなっている。いずれも藤澤編年第７型式に相当しよう[21]。32～35は山皿である。33は若干丸味を残すものの、いずれも底部内面から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、体部と底部内面との境界が明瞭なタイプである。時期は山茶椀と同じと考えてよいだろう。36は陶器の鉢で口縁部はやや肥厚し外側に開く。口縁部付近の内面に疎らに自然釉がかかる。31は灰釉陶器の椀の底部である。

ＳＤ７出土遺物（40～42）

40・41は山茶椀である。40は小型で高台径も小さく、体部は口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部付近に若干自然釉がかかる。底部外面に「上」の墨書がある。42は灰釉陶器の椀の底部である。

ＳＤ８出土遺物（37・38）

共に山茶椀である。37は割にしっかりとした高台を貼り付けており、体部も内弯ぎみである。38は全体的に体部は丸味を持ち、底部付近から口縁部にかけて外に開く。口縁端部も緩やかに外反する。内面は自然釉がかかり、部分的に黒く煤けている。藤澤編年第５型式あたりと思われる[22]。

ＳＤ９出土遺物（43～45）

43・44は灰釉陶器の椀の底部で、断面三角形の高台を貼り付けている。底部外面には糸切り痕が残り、内面はナデにより調整されている。百代寺窯以降のものと思われる。46は土師器の盤の台部分かと考えられるものだが、磨滅が激しいために調整は不明である。

ピット、その他出土遺物（46～48）

46～48は山茶椀である。46は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は角張っており、付近には自然釉がかかる。底部外面には低い高台を貼り付けた後、ナデ調整及び糸切り痕が見られる。内面には焼成時に上面に重ねられた山茶椀の高台部分が残存している。47は、底部付近は内弯し口縁部にかけて緩やかに外反している。しっかりとした高台を貼り付けた後、ナデ調整され糸切り痕も残る。48は底部のみだが、外面に「上」の墨書がある。

Ⅴ．結　　語

今回の調査ではわずかな範囲ではあったが、掘立柱建物２棟をはじめ、多くの遺構や遺物を確認できた。また、敷伝遺跡は中世が中心となる時期と考えられていたが、今回の調査では、それに加えて古墳時代前期と見られる遺物がまとまって出土したことは注目される。

（１）ＳＺ11について

土器群が出土したＳＺ11は、西側では遺物が確認されなかったことからも、ここから東に向かって地形が緩やかに落ち込む地点の始まりを検出したものと考えられる。当時、土器がここから東に投棄されていたものと思われ、調査区の隣接地にはこれらの土器を使用した人々の居住域が存在していた可能性もある。また、出土土器の中で高杯の比率が高いことも注目される。

（２）中世の遺構・遺物について

土坑２基、溝７条、掘立柱建物２棟の遺構を確認した。調査区東半で溝が集中し、その西で掘立柱建物がみられる。

今回の調査区は中ノ川の南岸に位置しているが、そのちょうど対岸にあたる平成元年度に調査された第１次調査では、平安時代後期を中心とする遺構・遺物が確認されている。中ノ川は元々今回の調査区の南側を蛇行していたことからも、両遺跡を一連のものとして捉えることに無理はないだろう。第１次調査と今回の調査では遺構の方向性などが必ずしも類似しているとはいえないが、遺跡の時期や立地等からもとはひとつの集落であったと考えられる。

また、第１次調査においては、平安時代末期には土師器皿類より山茶椀、山皿の出土量の方が目立つという報告がある[㉒]が、今回の調査区で同じ時期の遺構であるＳＫ10を見ている限りでは、土師器皿の出土も決して少なくはない。こういった器種組成の割合についても、今後もっと豊富な資料に基づいて検証していく必要があるだろう。

［註］

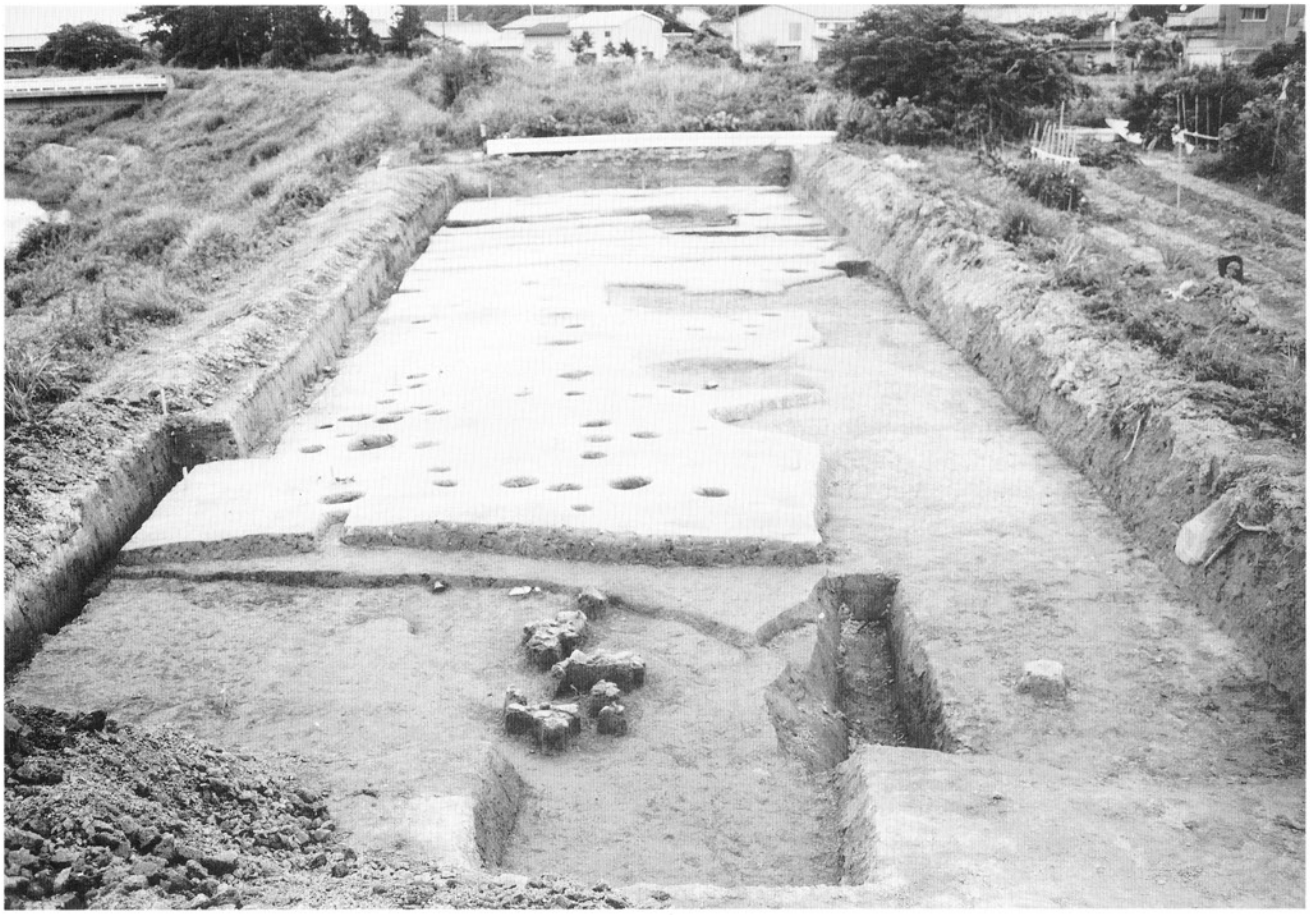
① 『第３回埋蔵文化財展　中ノ川流域の考古学』　鈴鹿市教育委員会　1993
② 前掲①
③ 『鈴鹿市史』第一巻　第一章　鈴鹿市教育委員会　1980
④ 中森成行「西川遺跡」『郡山遺跡郡発掘調査報告Ⅰ』鈴鹿市教育委員会　1983
⑤ 倉田直純・服部芳人「西条遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター　1993
⑥ 前掲①
⑦ 仲見秀雄「畑遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会　1967
⑧ 前掲①
⑨ 前掲③　第二章
⑩ 真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会　1967
⑪ 前掲①
⑫ 前掲①
⑬ 服部芳人「敷田遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』　三重県教育委員会　三重県埋蔵文化財センター　1993
⑭ 倉田守「橋門遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－本文編－』　三重県教育委員会　1989
　堀田隆長「Ⅱ鈴鹿市三宅町　橋門・長法寺４号墳」『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』　三重県埋蔵文化財センター　1991
⑮ 『三宅西条城跡発掘調査報告』　三重県教育委員会　1983
⑯ 山田猛「山城遺跡」『山城遺跡・北瀬古遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　1994
⑰ 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994
⑱ 赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム　中世常滑焼をおって　資料集』　日本福祉大学知多半島総合研究所　1993
⑲ 斉藤孝正「施釉陶器年代論」『論争・学説　日本の考古学６』雄山閣　1991
　斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３　施釉陶器』　古代の土器研究会　1994
　小森俊寛「平安京出土の灰釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３　施釉陶器』　古代の土器研究会　1994
⑳ 前掲⑱
㉑ 前掲⑰
㉒ 前掲⑰
㉓ 前掲⑬

No.	登録No.	器　種	出土位置	法量［cm］	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎　土	焼成	色調	備　考
1	005-01	土師器高杯	ＳＺ11	口：17.8　底：11.8 高：2.0	口縁部1/4	内：杯部・脚部ナデ、シボリ痕　外：杯部脚部ナデ	密　細砂粒少し含	良	橙　色	
2	004-03	土師器高杯	ＳＺ11	口：17.5	口縁部1/2	内：杯部ナデ、口縁部ヨコナデ、脚部ナデシボリ痕　外：杯部ナデ、口縁部ヨコナデ脚部工具ナデ	密　細砂粒含	良	橙　色	
3	001-05	土師器高杯	ＳＺ11	口：17.5	口縁部1/2	内：杯部ナデ、口縁部ヨコナデ　外：脚部工具ナデ	やや密　微砂粒含	並	橙　色	
4	005-02	土師器高杯	ＳＺ11	口：17.0　底：10.0 高：10.7	口縁部1/2 底部3/4	内外面ともに磨滅が激しく調整不明	やや粗　細砂粒少し含	良	黄橙色	
5	004-01	土師器高杯	ＳＺ11	口：20.6	口縁部3/4	内：ナデ、ヨコナデ　口縁部ヨコナデ 外：ナデ、口縁部ヨコナデ	密　細砂粒少し含	良	にぶい橙色	
6	004-02	土師器高杯	ＳＺ11	口：15.3	口縁部ほぼ完存	内：ナデ、ヨコナデ、外：ナデ、ヨコナデ	密　細砂粒少し含	良	浅黄橙色	
7	001-04	土師器高杯	ＳＺ11	口：15.0	口縁部ほぼ完存	内：ナデ、口縁部ヨコナデ 外面は磨滅が激しく調整不明	粗　微砂粒含	並	橙　色	
8	003-01	土師器高杯	ＳＺ11	底：10.6	底部完存	内外面ともに磨滅が激しく調整不明	粗　微砂粒含	不良	浅黄橙色	
9	003-03	土師器 小型丸底壺	ＳＺ11	胴部：8.7	底部ほぼ完存	内：ナデ　外：ナデ	やや密　微砂粒含	並	にぶい橙色	
10	003-02	不　明	ＳＺ11	最大径：3.8 長：9.5	—	外：オサエ	密　微砂砂粒含	並	にぶい黄橙色	上部外面に煤
11	006-01	土師器 台杯甕	ＳＺ11	口：18.2	口縁部1/8	内：ナデ　口縁部ヨコナデ　外：ナデ　口縁部ヨコナデ　体部に黒斑	やや粗　細砂粒含	並	にぶい橙色	台部欠損
12	008-01	山茶椀	ＳＫ１	底：5.6	底部1/2	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗～２㎜の砂粒含	良	灰白色	尾張型
13	007-05	山茶椀	ＳＫ１	底：9.2	底部1/8	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ナデ　モミガラ痕多　底部内面に自然釉	粗　～１㎜の砂粒含	良	灰白色	尾張型
14	009-02	陶器　鉢	ＳＫ１	底：12.0	底部1/8	内：ロクロナデ　底部に使用痕、自然釉 外：ヘラケズリ　高台貼付後ナデ	やや密～３㎜の砂粒含	良	灰　色	尾張型（知多窯産か）
15	002-02	陶器　甕	ＳＫ１	底：13.5	底部1/4	内：ナデ　外：ナデ　底部未調整	やや密　微細砂粒含	並	にぶい橙色	常滑窯産
16	002-01	陶器　鉢	ＳＫ１	口：34.6	口縁部1/4	内：ロクロナデ　外：口縁部ロクロナデ、ナデ	密　微細砂粒含	並	にぶい橙色	常滑窯産
17	014-01	陶器　甕	ＳＫ１	口：40.0	口縁部3/8	内：口縁部ヨコナデ、オサエ　外：口縁部ヨコナデ、ナデ、粘土接合痕	密　細砂粒含	良	灰白・褐白色	常滑窯産
18	008-04	灰釉陶器 皿	ＳＫ10	口：10.1　底：5.8 高：1.7	底部完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ナデ	密　微砂粒少し含	良	灰白・淡黄色	
19	007-03	灰釉陶器 椀	ＳＫ10	底：8.4	底部完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ナデ	やや密　微砂粒含	良	灰白色	
20	007-04	灰釉陶器 椀	ＳＫ10	底：8.5	底部完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ナデ	やや密～１㎜の砂粒含	良	灰白色	
21	007-02	土師器　椀	ＳＫ10	口：14.8　底：6.3 高：4.0	口縁部1/4 底部完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗～1.5㎜砂粒含	並	浅黄橙・灰褐色	
22	008-03	土師器　皿	ＳＫ10	底：4.4	底部3/4	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ、底部糸切り	やや粗～1.5㎜砂粒含	並	灰黄色	
23	008-02	土師器　皿	ＳＫ10	底：5.5	底部2/3	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ、底部糸切り	やや密　微砂粒含	並	浅黄橙・灰褐色	
24	008-06	土師器　皿	ＳＫ10	口：10.2　底：4.6 高：1.7	口縁部1/4 底部1/2	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ、ナデ 底部糸きり	密　微砂粒含	並	浅黄橙色	外面全面に黒斑

第１表　出土遺物観察表（１）

No.	登録No.	器　種	出土位置	法量［cm］	残存度	形態・技法・調整等の特徴	胎　土	焼成	色調	備　考
25	008-05	土師器　皿	SK10	口：10.1　底：4.6 高：2.1	口縁部1/4 底部1/4	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	密　微砂粒含	並	浅黄橙色	
26	007-01	土師器　甕	SK10	口：18.0 胴部：24.3	口縁部1/3 胴部1/4	内：ナデ　口縁部ヨコナデ　外：口縁部ヨコナデ、ナデ、オサエ	やや粗～2.5mm砂含	並	灰白色	
27	012-01	山茶椀	SD6	口：16.0　底：8.6 高：5.0	口縁部1/4 底部1/2	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型（知多窯産か）
28	011-03	山茶椀	SD6	口：15.2　底：7.0 高：6.0	口縁部1/4 底部1/2	内：ロクロナデ、ナデ　口縁部ヨコナデ　外：口縁部ヨコナデ　ロクロナデ　底部糸きり後ヨコナデ　モミガラ痕多	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
29	012-03	山茶椀	SD6	底：5.6	底部1/2	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
30	010-02	山茶椀	SD6	口：14.0	口縁部1/3	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
31	010-06	灰釉陶器椀	SD6	底：7.0	底部1/4	内：ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	内面に疎らに自然釉
32	012-02	山　皿	SD6	口：8.1　底：4.7 高：1.9	口縁部1/2 底部完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗　細砂粒含	並	灰　色	尾張型（知多窯産か）
33	011-01	山　皿	SD6	口：7.5　底：4.3 高：1.5	ほぼ完存	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型（知多窯産か）
34	011-04	山　皿	SD6	口：8.2　底：3.3 高：2.0	口縁部2/3 底部3/4	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗　細砂粒含	並	灰黄色	尾張型（知多窯産か）
35	011-05	山　皿	SD6	口：8.1　底：4.7 高：1.9	口縁部1/4 底部3/4	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	握美・湖西型
36	010-01	陶器　鉢	SD6	口：36.0	口縁部1/8	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　内面に疎らに緑白色の自然釉	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
37	010-03	山茶椀	SD8	底：7.4	底部3/8	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり後ナデ消し　高台貼付後ヨコナデ	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	握美・湖西型
38	011-02	山茶椀	SD8	口：15.6　底：6.7 高：5.7	口縁部1/4 底部完存	内：ロクロナデ、ナデ　底部に自然釉、ス ス付着　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型（知多窯産か）
39	009-01	陶器　甕	SD3	口：17.8	口縁部1/8	内：口縁部ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ	やや密　～4mm砂粒含	良	にぶい赤褐色	常滑窯産
40	013-01	山茶椀	SD7	口：12.5　底：4.2 高：5.0	口縁部1/2 底部完存	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多　口縁部に自然釉　底部墨書「上」	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
41	012-05	山茶椀	SD7	底：6.4	底部1/3	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	尾張型
42	012-04	灰釉陶器椀	SD7	底：4.0	底部1/2	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	密　微砂粒含	並	灰白色	内外面疎らに施釉
43	010-04	灰釉陶器椀	SD9	底：7.6	底部2/3	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	
44	010-05	灰釉陶器椀	SD9	底：7.8	底部ほぼ完存	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	
45	012-06	土師器　盤	SD9	—	—	磨滅が激しく調整不明	やや粗　細砂粒含	並	灰白色	
46	001-01	山茶椀	B3 pit10	口：14.5　底：6.5 高：5.5	口縁部1/4 底部完存	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ　モミガラ痕多　口縁部に自然釉	密　微砂粒含	並	灰白色	尾張型
47	001-02	山茶椀	表　土	口：16.1　底：8.4 高：5.8	口縁部1/8 底部1/4	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	密　微砂粒含	並	灰白色	
48	001-03	山茶椀	表　土	底：7.5	底部完存	内：ロクロナデ、ナデ　外：ロクロナデ　底部糸きり　高台貼付後ヨコナデ	密　微砂粒含	並	灰白色	内面自然釉　底部外面墨書「上」

第2表　出土遺物観察表（2）



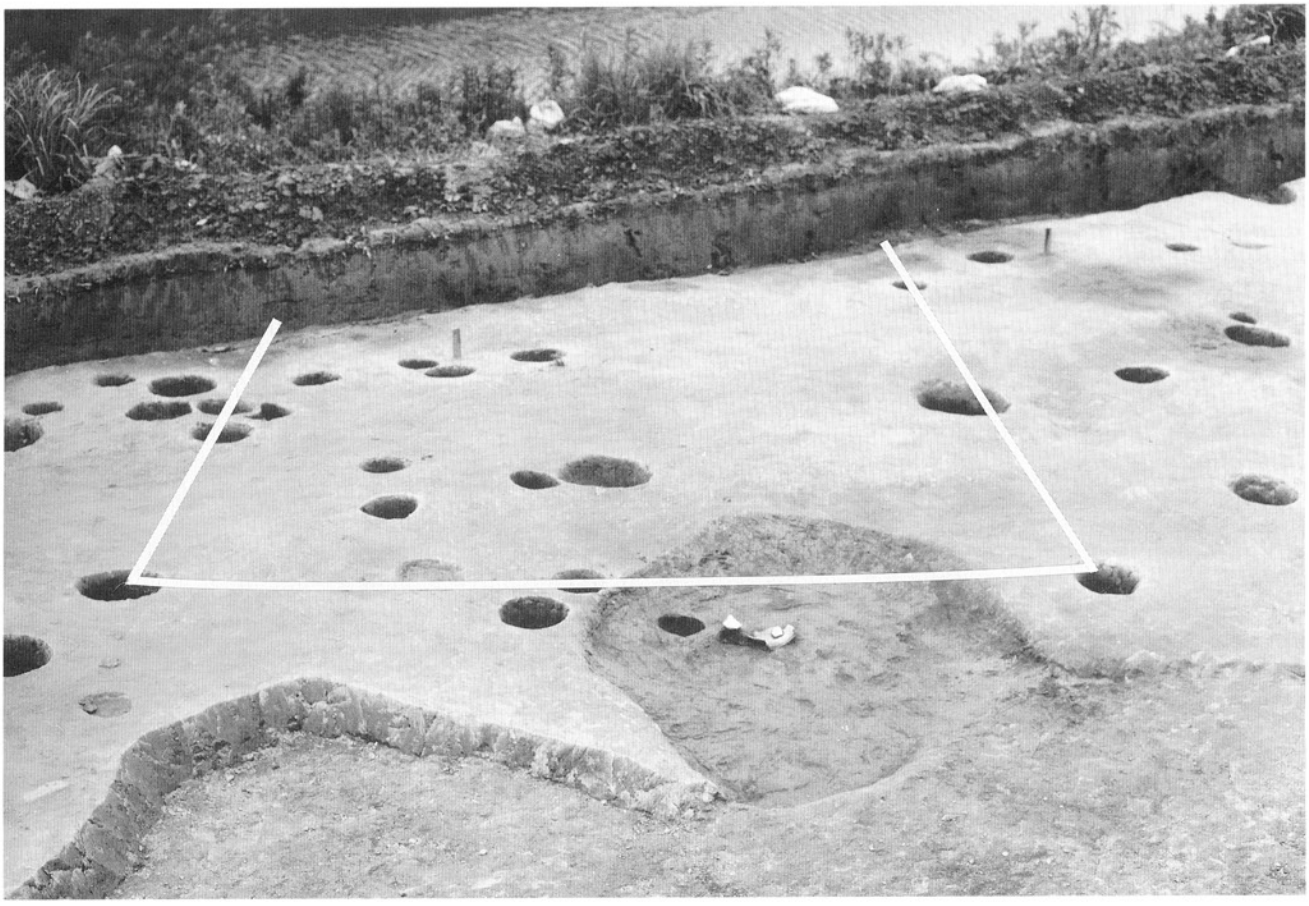
調査区全景　西から

調査区全景　東から

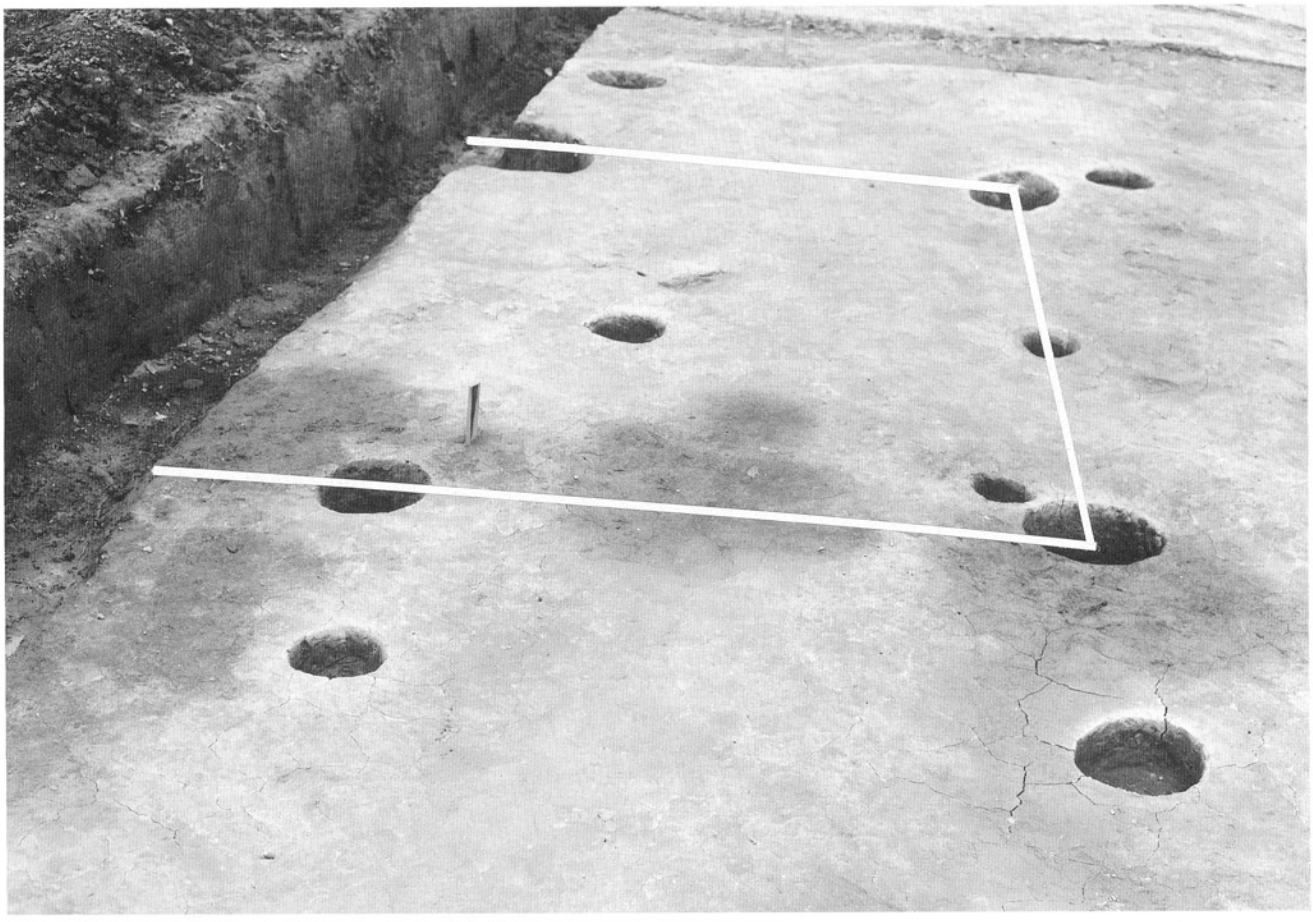
図版２

ＳＺ11遺物出土状況　北から

ＳＫ１遺物出土状況　北から

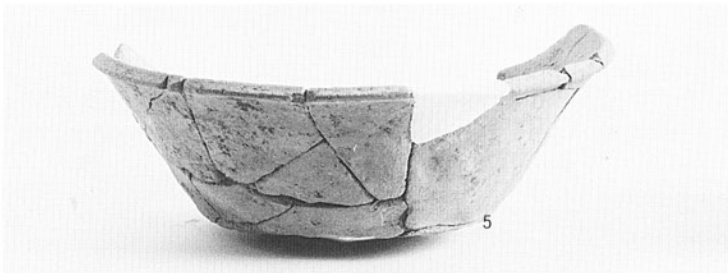


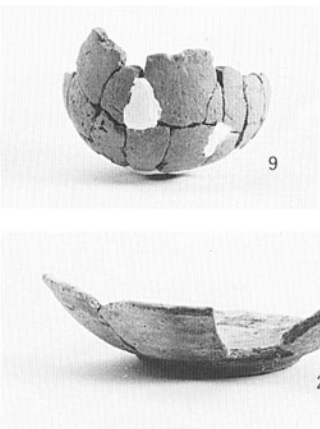
ＳＢ12　南から

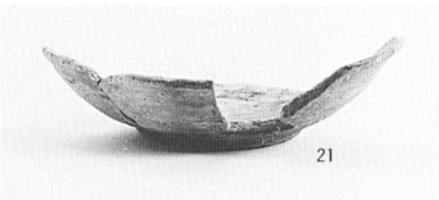


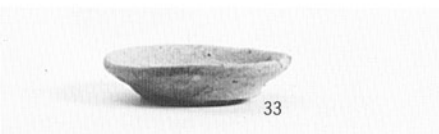
ＳＢ13　西から

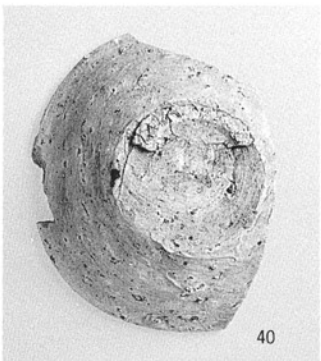
図版 4











出土遺物（1：3）

報告書抄録

ふりがな	しきでんいせき　だいにじ　はっくつちょうさほうこく
書名	敷伝遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	鈴鹿市徳居町字敷伝
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１３５
編著者名	日栄智子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川503番地　　TEL　05965-2-1732
発行年月日	西暦１９９６年３月２９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しきでんいせき 敷伝遺跡 （第２次）	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 とくすいちょう 徳居町 あざしきでん 字敷伝	24207		34° 49′ 10″	136° 30′ 50″	19950515～ 19950609	400	一般地方道鈴鹿芸濃線地方特定道路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
敷伝遺跡 （第２次）	集落	古墳時代前期 平安時代後期 ～鎌倉時代	掘立柱建物２棟 土坑２基 溝７条	土師器高杯・甕 土師器皿・鍋 山茶椀 灰釉陶器 陶器片口鉢・甕	

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 135

敷伝遺跡(第2次)発掘調査報告

――鈴鹿市徳居町字敷伝――

1996・3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　株式会社オリエンタル印刷